

## 地中海三千年の歴史が重層する島

長谷川 修

数年前友人と「死ぬまでに行ってみたい所はどこだろう」と話しており、期せずしてシチリアで一泊し、二人で「シチリア島を極める十日間の旅」に出た。フェニキア人の渡来以来三千年の歴史を持つこの島は、全島にわたり見どころ満杯だったが、特に印象に残ったのは古代のシラクーサと中世のパレルモだ。

シラクーサは、ギリシャの植民市から始まり、紀元前四世紀には人口二〇万人を擁し当時世界有数の大都だった。収容人員一五〇〇〇人の野外劇場跡や、アテナ神殿からの転用品である大聖堂の石柱には、往時の隆盛が偲ばれる。そのころアテネのプラトンはシラクーサ国王から政治顧問に招かれ、三度、渡島・滞在し「哲人政治」を説いた。また、一五〇年後のポエニ戦争では、この町で生まれ育ったアルキメデスは新兵器の開発に努め、軍司令官としてローマと戦った。

紀元後はローマ、ビザンツの支配下を経て、九世紀にはイスラムの侵攻を受ける。イスラムはこれまでの粗放農業のシチリアに、灌漑技

術やレモン、オレンジ、サトウキビ等の新作物を導入し、農業生産を飛躍的に高め、パレルモは貿易港として発展する。

イスラムに続き一二世紀には北フランスからノルマン人が征服し、ノルマン＝シチリア王国を建てる。王国では開明君主のもとに宗教、民族、文化の融和が図られ、パレルモは首都として繁栄した。宮廷の書記官は、ラテン人、アラブ人、ギリシヤ人各二名の六名体制とし、王室礼拝堂は、正面はノルマン風、壁面はビザンチンのモザイク画、天井の装飾はアラブ模様と混合様式だ。またギリシヤ語やアラビア語の文献からラテン語への翻訳が精力的に行われ、シチリアは「一二世紀ルネサンス」の発信地となった。ノルマン朝は一五〇年の短い期間ながら、後世の西欧文明に与えた影響は広く大きい。

島で出会った人は、目鼻立ちが整ったギリシヤ系、黒い髪に浅黒い肌のアラブ系、肌が白く長身のノルマン系と多様で、歴史と共生を実感する旅となった。